

「国史跡 加越国境城跡群及び道」の価値を再考する

塩谷 忠士

令和二年九月例会にて「国史跡 加越国境城跡群及び道」の講演会に参加した後、現地を訪れ、改めてその価値とは何かを考え、思ったことをまとめてみました。

一、「国史跡 加越国境城跡群及び道」とは

平成二七年一〇月一七日に指定され、切山城跡、松根城跡、小原越で構成される。対象となる二城が築城されたのは、本能寺の変から二年後の天正一二年（一五八四）、親羽柴秀吉方の加賀・能登領主前田利家と、反羽柴秀吉方の越中領主佐々成政が対立し、加越国境が軍事的緊張状況になったことに起因する。佐々方は峠道のより高い場所を占拠し、街道の変更を伴うような築城や改修を行なった。指定対象の小原越では前田方が切山城を築城し、佐々方は松根城を大改修して対峙する状況が、翌年佐々成政が降伏するまで続いた。

二、松根城改修に伴う小原越の変更

中世において山城を築城した理由は、街道を軍事的に監視する目的とか、籠城する目的とかが考えられる。街道を監視する目的の山城の多くは街道のよく見える高い場所から見下ろして、仮に攻められたとしても有利になるよう防御施設（土塁や櫓台など）を設けて

いる。前田方の築城した切山城が小原越に沿って高切岸という防御施設を築いて監視と防御を両立させるといふ定番構造の一方、劣勢だった佐々方の松根城には違う構造がみえる。松根城は東西を結ぶ小原越の他に北方の田近越に合流する道があり、城域は南北に長く小原越に面する部分は相対的に短くなっている。佐々方が大改修する以前に一向一揆の砦跡だった頃の城域は、現状の高切岸に囲まれた馬出虎口より北側頂上部のみだったと私は考えている。当時はその南側の新設された駐車場（国史跡標柱や史跡案内のある平坦地）や馬場跡と伝えられる曲輪はなく、小原越が城のすぐ傍を通っていたのだろう。劣勢だった佐々方は小原越に接する部分が短く防御力が低いことを問

松根城と小原越



「加賀中世城郭図面集」（佐伯哲也氏）の縄張図の一部に加筆

題視し、攻撃の時間を稼ぐために小原越を潰して曲輪を新造し、加賀側の小原越との間に大堀切を造って街道を切断したのではないだろうか。この大堀切は深いところで約十六メートルにもなる巨大な堀切であり、城郭研究者の佐伯哲也氏は著書の中で「小原道も完全に遮断され、平時は木橋が架けてあったのである。勿論合戦時には木橋を撤去する。」と述べている。廃城後は新造された曲輪の南側に沿う狭い横堀道が小原越として代用されたと推定されている。加賀から進攻するにはこの横堀道を進み、現在の駐車場入口付近にあったと想定される大手門を目指すよう誘導される。この大回り、かつ一列縦隊の進軍の間、新造された曲輪から絶えず横矢が掛けられ、多くの犠牲者が出ることは容易に想像される。街道の切断という希有な事例はこうして誕生したのではないかと思う。

今年度、追加調査のため数年ぶりに大堀切と続く加賀側の小原越の一部がきれいに除草されたと聞いて現地に向かった。露わになった大堀切の全容を前に、この大堀切こそが国史跡の指定に至る最重要の遺構だと実感することになった。金沢市が作成したパンフレットには、「山城が軍事的に道路を切断した初めての事例」とある。今まで背の高い草に覆われた堀切を見ていたので実感がなかったが、是非今後は常時見えるように定期的に除草を行い、他の訪城者にも見て欲しいと願っている。

先の例会講演会では、国史跡への追加指定に向けて今年度から二俣越に築城された高峠城跡（前田方）と荒山城跡（佐々方）の調査に着手したことが発表された。私は荒山城でも松根城と同様のことが行なわれたのでないか、という期待を持って荒山城に向かった。

大堀切（南から）



大堀切（東から）

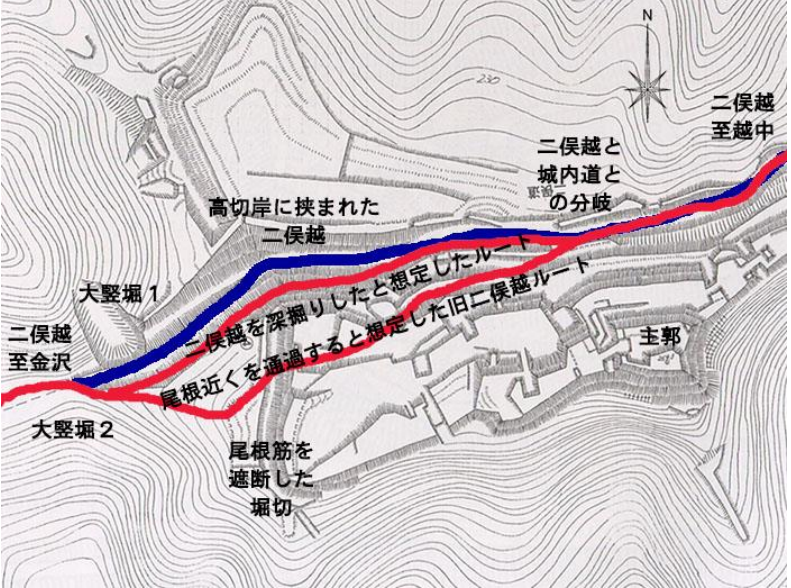


三、荒山城と二俣越

二俣越では前田方が高峠城を、佐々方が荒山城を築いている。高峠城は切山城と同じく二俣越に沿う高切岸で防御している。一方の荒山城は二俣越に沿って同じく切岸を築いていると評価されているが、一部高いとは言い切れない場所があり気になる。荒山城で注目する場所は、尾根筋の西端の堀切と、堀切が二俣越と接する辺りの十メートルを超える高切岸であろう。

荒山城について描いた佐伯哲也氏の縄張図では、二俣越の西の入口付近の北側に大堅堀を描き、南側には堅堀を描いていない。しかし、高井勝己氏が著書に描いた縄張図は南側にも堅堀を描いている。現地を確認するとその凹みは自然地形にも見えるし人為的にも

荒山城と二俣越



「加賀中世城郭図面集」(佐伯哲也氏)の縄張図の一部に加筆

見えて判断が付かない。この南側の凹みについて私は主郭のある尾根筋の防御力を高める目的で、尾根続きを崩したのではないかと考えた。その尾根筋に登ってみると、最初こそ足の掛かる部分が厳しいが、尾根筋は比較的歩きやすく感じた。この尾根が仮に凹みの上を緩やかに続いていたらとすれば旧二俣越は尾根近くを通っていたことも想定できる。二俣越を崩して堅堀と堀切を築造し、二俣越は守りやすいルートに変更するという松根城とは違う構造を選択したのではないか。そう考える理由は、城内を横切る道と上の曲輪との段差及び二俣越と合流する分岐までの斜度が一定に近く峠道のように感じることに、尾根筋を遮断する堀切、北側の大堅堀に接する不自然に狭い二俣越、そこを通過した後は急坂のうえに両側に大切岸が控えていることにある。それらにどうにかして加賀からの進攻を入口で食い止めたという佐々方の意図を感じるのである。加賀からの想定進攻ルートは、佐伯哲也氏によると現状の二俣越を進んで、東端に近い大堀切のある曲輪から城内に入るとされる。しかし、先の分岐あたりの曲輪と二俣越の高低差は決して高いとは言えず、進入できるように思える。だから、そこに至るまでに敵を殲滅することを絶対条件として、進攻する敵兵数を減らすための防御施設と言えないだろうか。特に西端あたりから分岐までの間において、尾根近くの旧二俣越を変更したと想定するルートと、旧二俣越はもう少し尾根寄りだったと想定しつつ、堅堀と高切岸の築造により下にずれたと想定したルートの2つを考えた。これら想定が証明されるかは今後の発掘調査次第であるし、すでに失われていて証明できないかもしれないが、金沢市の調査報告を楽しむに待つことにしたい。

二俣越と大堅堀 1 (東から)



高切岸 (西から)



四、おわりに

山麓に通る街道を監視する目的で築城された山城は全国各地に数多く存在しているが、街道の変更を伴って築城された山城は全国でも少ない。今回その希有な事例が、天正一二年頃という築城年代をも確定できる状況で現在まで残っているという奇跡が、国史跡に足る価値なのだと再認識しました。今後二俣越の調査は進むでしょう。調査により何が発見されるのか楽しみにしている。更には国史跡の追加指定が実現し、加越国境城郭群が全国に注目されることを期待する。他県に残る山城を訪城する中で、多様な防御施設を持つ山城、壮大な規模を持つ山城などと比べても、石川県内には自慢できる城跡が少ないと思ってきましたが、加越国境城郭群は自慢できると思い至りました。そこはまさに戦国時代の緊張感と息吹を感じることができ場所なのですから。

参考資料

「国史跡 加越国境城跡群及び道」パンフレット（二〇一六年・金沢市文化財保護課）、加賀中世城郭図面集（二〇一七年・桂書房）、図説・石川県の城Ⅲ 北加賀の山城（二〇〇一年・高井勝己）、加越国境城郭群と古道調査報告書「切山城跡・松根城跡・小原越」（二〇一四年・金沢市埋蔵文化財センター）